

高機能自閉症児における命題的心理化の促進 —言語能力の違いがもたらす効果の検討— (中間報告)

立教大学大学院現代心理学研究科 和田 恵
立教大学現代心理学部 大石 幸二

Promotion of propositional mentalization in high-functioning autism spectrum disorders children: The effects of difference of verbal ability.

Master's Program in Psychology, Rikkyo University Graduate School of Contemporary Psychology,
WADA, Megumi
Faculty of Contemporary Psychology, Rikkyo University, OISHI, Kouji

要 約

高機能自閉症 (High-functioning autism spectrum disorders : HFASD) 児の対人相互交渉の困難は他者理解の困難が背景として想定されており、これを測る指標として心の理論 (Theory of Mind : ToM) を用いた研究が行われてきている。先行研究から、言語能力が高いほど ToM に通過することが示されており、言語的な理由付けによる他者心情の推測という“命題的心理化”を HFASD 児に学習させられる可能性が示唆されている。また、HFASD 児には情報の細部に注意する弱い中枢性統合という傾向があるとされ、この特性のために、状況に応じた振る舞いや他者心情の推測に失敗することが推察される。以上のことから、HFASD 児の弱い中枢性統合を考慮し、細部に注意しながら社会的文脈を言語的に分析する課題を用いて介入を行えば、命題的心理化の学習を促すことができると考えられる。本研究では、HFASD 児の命題的心理化を促進させるための課題を作成し、HFASD 児への介入から、命題的心理化を促進させる効果と言語能力との関連を比較検討する。

【キー・ワード】高機能自閉症, 命題的心理化, 弱い中枢性統合

Abstract

High-functioning autism spectrum disorders (HFASD) children have difficulty understanding other's minds. In order to measure it, many studies have been conducted using Theory of Mind tasks. In previous research, three points have been suggested: First, the greater the verbal ability of HFASD children, the more they pass the Theory of Mind task. Second, it may be possible for them to learn “propositional mentalization”, which allows them to read other's mental states, using verbal reasoning. Third, the tendency of children with HFASD to focus intensely on details

of information and to have weak central coherence is probably one of the main factors responsible for their difficulty understanding other's minds.

From the above findings, this study hypothesized that by analyzing social situation using verbal methods together with focusing on details of information, the learning of propositional mentalization can be promoted in HFASD children. This study aimed to (1) develop the instruments necessary for promoting propositional mentalization and (2) conduct interventions with HFASD children and compare the effects of promoting propositional mentalization through their verbal ability.

【Key words】 high functioning autism spectrum disorders, propositional mentalization, weak central coherence

問題と目的

高機能自閉症（High-functioning autism spectrum disorders : HFASD）児の対人相互交渉の困難については、他者意図や信念、思考の理解の困難が主たる背景要因として想定されてきており、他者理解を測る指標のひとつとして、心の理論（Theory of Mind : ToM）を用いた研究が行われてきた（鈴木他, 2013）。別府・野村（2005）によれば、HFASD 児は他者の心情推測において、直観的な推測という段階を欠いたまま命題的心理化を行うようになるという。命題的心理化とは、言語的理由付けにより他者の心情を推測することである。ToM で測定される心理化能力と高い言語能力との関連が示されていることから、心理化において言語能力が大きな役割を果たしていることが考えられる（Happe, 1995）。別府（2007）は、HFASD 児の心理化は言語を中心とした認知能力により補償されるとして、HFASD 児にそれを教え、学習させられる可能性を示唆している。

また、HFASD 児には情報の全体より細部に注意するという弱い中枢性統合の傾向がある。弱い中枢性統合のために、HFASD 児は場面に即した振る舞いや、他者心情の推測において困難を抱えることが推察される（Frith, 2003）。

以上のことから、HFASD 児に命題的心理化の学習を促すことができる可能性が推測され、その際に言語能力が重要な役割を果たすと考えられる。また、HFASD 児の弱い中枢性統合という特性を考慮すれば、全体的で曖昧な情報ではなく、明確な個々の情報に着目しながら社会的文脈の分析を行うことで、より少ない負担で心理化を行うことが可能であると推察される。

しかし、HFASD 児に心の読み取りを学習させようと試みた先行研究において、弱い中枢性統合や言語能力に着目し、具体的な介入を通して検討したものは少ない。さらに、心理化に関する先行研究の多くは、心の理論課題の通過率を用いて検討を行っており、より現実に即した対人場面を模した課題は作成されておらず、介入の方策は未検討である。

本研究の目的は、①HFASD 児の命題的心理化を促進させる介入で用いるための課題を作成し、妥当性を確認すること、②作成した課題を用いて、命題的心理化を促進させる効果と言語能力との関連を比較検討することである。

方法

本研究は、以下の「予備調査 (①～③)」と「本調査 (①と②)」から構成される。予備調査は、本調査①、②で介入を行うための妥当性のある課題の作成が目的である。

予備調査

倫理的配慮：本研究の実施に際し、所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得た（機関承認番号：19-21）。十分な説明の上で同意を得た教諭、保護者、児童のみを対象とする。

①日常における典型的な社会的エピソードの調査

対象者：学級担任経験のある小学校教諭 15 名と、9～10 歳の小学生児童の保護者 77 名を調査対象者とする。

手続き：質問紙調査を実施し、「児童間でどのような問題が起こったか、どのようなことで困ることが多いか、また、それはどのように解決されたか」について、自由記述法で回答を求める。自由記述の中から共通性の高い典型的な社会的情報を抽出する。

②課題に用いる社会的エピソードの選定

手続き：①で抽出されたエピソードのうち、社会的エピソードとして破綻しているなど適切でないものを除外し、残りを課題のストーリーとして採用する。選定は、心理学を専攻する大学院生複数人による合議制で行う。選定したストーリーを元に、2 枚から構成される社会的場面を模した絵カードを作成する。

③課題におけるストーリー（絵カード）の妥当性の確認

対象者：9～11 歳の定型発達児 10 名を調査対象者とする。

実施場面：調査対象者全員に対して一度に課題を行う。協力を依頼する学校の教室内にて絵カードを部屋の前面に投影し、参加者は机上で作業を行う。

手続き：②で作成した絵カードが適切にエピソードを反映できているか、妥当性の確認を行う。調査対象者に社会的場面に関するストーリー（絵カード）を示し、調査対象者がワークシートに表情などの客観事実を書き出し、絵カードの登場人物の心情やその場面での望ましい行動を推測する課題を行う。また、各絵カードのストーリーの要約をワークシートに記述してもらい、記述された文脈を参考に、対象者が書き出した客観事実の回答と予め研究実施者が作成した模範回答を照らし合わせ、算出した正答率が 8 割を超えたものを介入に用いる課題とする。

本調査

①絵カード課題を用いた心理化精度と言語能力の比較

対象者：知能検査（WISC-IV）において正常範囲の知能を持つ 9～11 歳の HFASD 児 30 名を介入対象者とする。

手続き：AQ 日本語版児童用の質問紙と心の理論（一次・二次の誤信念）課題を用いて、自閉スペ

クトラム指数におけるサブタイプと心理化能力を測定する。また、絵画語り発達検査（PVT-R）と J.COSS 日本語理解テストを実施し、語彙と文法の両面から言語能力を測定する。その後、全 9 回のセッションを行い、予備調査で作成した 2 枚一組のカードを用いて以下の課題を実施する。予備調査③と同様の手続きで介入対象者が書き出した回答と模範回答を照らし合わせ、正答率の推移を比較検討する。2 セッション続けて 8 割以上の正答が続いた場合は、ワークシートの項目表記段階を移行する。項目表記は《客観事実の項目名が全て表記されている》→《項目名が表記されておらず、項目名を記入後に情報の書き出しを行う必要があるが、一人では困難な場合は研究実施者がサポートを行う》→《項目名が表記されておらず、自分で項目名を記入後に情報の書き出しを行う》という 3 段階を設定する。全セッションを終えた後に心の理論課題を行い、介入前の通過状況と比較して介入の効果評価を行う。

②社会的情報の内的な処理過程の検討

対象者：本調査①と同様とする。

手続き：ワークシートの作業を終えた後、課題に用いた絵カードのストーリーと、記述した心情や望ましい行動についての理由を口頭で説明させ、そのナラティブを記録する。各セッションで得たナラティブから、「因果関係の理解」、「事実・出来事の推論」、「表情や様子の理解」、「他者の心情・意図の推論」への言及数を求め、その推移を比較することにより社会的情報の内的な処理過程について検討する。

考察の視座

本研究の実施により、「社会的な文脈」を扱う課題として、生態学的妥当性の高いツールを作成することができる。本研究で作成したツールを用いて、弱い中枢性統合という HFASD 児の特性を鑑みて彼らにとって行いやすいと考えられる心理化のストラテジーを、少ない負担で学習させるための具体的な介入方法を検討することが可能になる。

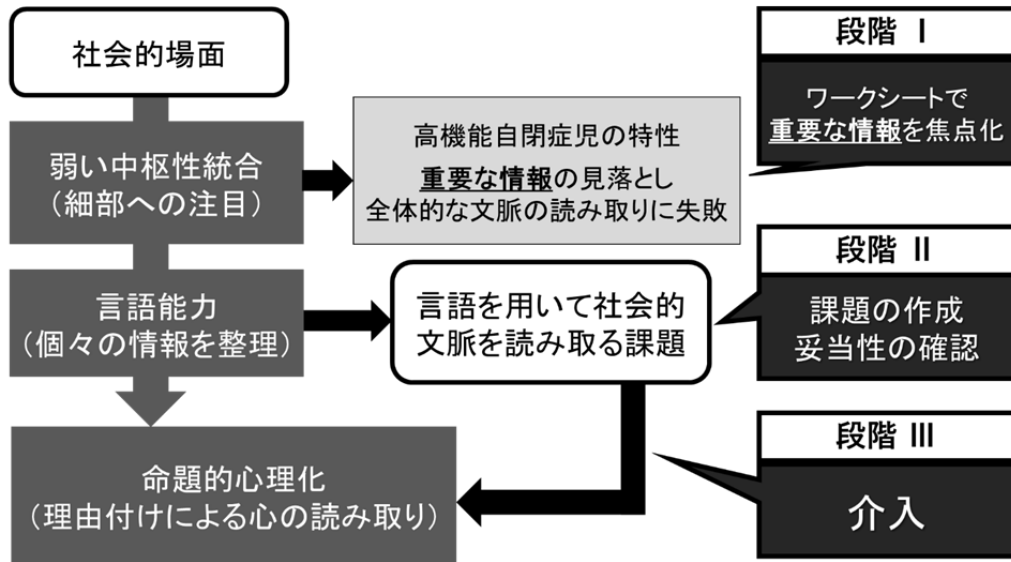


図1 本研究の介入による HFASD 児の命題的心理化促進についての仮説

引用文献

- 別府 哲 (2007). 自閉症における他者理解の機能連関と形成プロセスの特異性 障害者問題研究, 34, 259-266.
- 別府 哲・野村 香代 (2005). 高機能自閉症児は健常児と異なる「心の理論」をもつのか:「誤った信念」課題とその言語的理由付けにおける健常児との比較 発達心理学研究, 16, 257-264.
- Frith, U. (2003). *AUTISM Explaining the Enigma 2nd Edition*.
- (ウタ・フリス, 富田 真紀・清水 康夫・鈴木 玲子 (訳) (2009). 新訂 自閉症の謎を解き明かす (東京書籍)
- Happe, F. G. (1995). The Role of Age and Verbal Ability in the Theory of Mind Task Performance of Subjects with Autism. *Child Development*, 66, 843-855.
- 鈴木 徹・平野 幹雄・北 洋輔・郷右近 歩・野口 和人・細川 徹 (2013). 高機能自閉症児における対人相互交渉の困難の要因に関する検討—心の理論課題を通過する事例の様相に着目して— 特殊教育研究, 51(2), 105-113.

